

ネルヴァルの死について

井 田 三 夫

1. 謎の死

ジェラルム・ド・ネルヴァルは1855年1月26日未明、パリの下町、ヴィ
 エィユ・ランテルヌ街の薄暗い路地裏で縊死体となって発見された。以来
 この謎の死をめぐる、さまざまな臆説が提出されてきた。それらの臆
 説の代表的なものを挙げればりまず第一に自殺説がある。この説はさらに
 『オーレリア』における輝かしい救済の夢を“現実化”するために彼自ら
 積極的に死を“選び取った”とみるか（Jean Richer や Albert Béguin
 などの説）、あるいは経済的困窮・創作力の枯渇への不安などで人生に絶
 望して、自殺したと見るか（Raymond Jean などの説）によって二説に
 分れる。次に何者かによって殺害された後、自殺のように装われたとみる
 他殺説があり、これには秘密結社説（ネルヴァルはある秘密結社に属して
 おり、そのメンバーが作品発表による秘密の漏洩を防ぐために殺害した、
 とするもの）、追いはぎ説、誤解説（作品の素材集めのため夜のパリをま
 わってメモなどを取っていたネルヴァルを何者かが警察への密告者と誤解
 して殺害した、とみる説）などがあり、これは主として Gautier, Dumas,
 Houssaye などの彼の友人たちによって出された説である。この他殺説は
 Jean Richer や Léon Cellier もあまりに romanesque（小説的）である
 として退けているが同感である。最後に事故説があるが、これは Léon
 Cellier,²⁾ H. Lemaître,³⁾ J. Pommier⁴⁾ などが主張している説である。
 Cellier によればネルヴァルは Balzac の『人間喜劇』中の小説『追放され
 た人々』の主人公 Godefroid と自分を同一視し、詩人ダンテに救われる

ことを期待して、死と再生の儀式を自作自演したのだという。この儀式を演じながら、誤って自殺と同じ結果を招いた、と見る。この事故説には他にも Scarron の『ロマン・コミック』の影響を重視する H・de Graaf の説⁵⁾などがあるという。Jean Pommier の説は次のようなものである。《Zigzags》という旅行記の中で Gautier が伝える証言によれば、ネルヴァルは旅行中、馬車の中で、マフラー foulard を輪にして下げ、そこにあごを掛けてうたたねをする習慣があったという。彼は1月26日の明方、この方法で仮眠しようとして、誤って紐が締ってしまった、という見方である。この他にも精神錯乱による無自覚な発作的な自殺とみる説もある。

このようにネルヴァルの奇怪な死をめぐる無数の説が出されてきたわけだが、これらの説のいずれをも可能ならしめるところに、ネルヴァルの死の実相がある、と考えられもするが、そうやってしまっただけではほとんど何もいわなかったにも等しいわけで、われわれとしては以下に述べる理由によりネルヴァルの死は自殺であった、と考えたい。だが、その場合ネルヴァルは救済を得るため、死を積極的に選びとったのだろうか、それとも生きることに絶望し、死をよぎなくされたのだろうか。そしてまた、いずれの場合にせよ、ネルヴァルの死は彼自身にとってまたわれわれにとってどのような意味を持っているのだろうか。

2. 矛盾

自己の贖罪と救済の書としての『オーレリア』とヴィエニユ・ランテルヌの悲劇(自殺)との矛盾、この矛盾は一体何を意味しているのであろうか。というのは『オーレリア』における彼のキリスト教への復帰——この点に関しても疑義はあるが——が実人生においても実現されていたならば、自らの生命を絶つという悲劇は、周知のごとく少なくとも5世紀以後のヨーロッパのキリスト教では自殺を大罪として厳しく禁じている以上、常識的にはありうべからざることだからである。ところで Jean Richer⁶⁾

とか Albert Béguin⁷⁾ といったネルヴァリアンは彼の死について、この『オーレリア』とヴィエニユ・ランテルヌの悲劇との矛盾を見事に解消するある種の説明を行っている。Richer や Béguin のいう通り、なるほどネルヴァルは『オーレリア』において自己の不幸や悲惨を「救済」に至る一連の「試練」として自覚し、狂気の幻覚に愚弄されるかわりに、これを理性によって支配し、美的に結晶させ、そこに自己の生の実存的意味を見出すに至ったと思われる。『オーレリア』最終部の『メモラブル』におけるあの輝かしい救済の夢やその救済のイメージを支えている魔術的な文体から喚起される新鮮な現実感——Béguin のいう「限りなく神秘的ではあるが同時に限りなく現実的な現実」⁸⁾、いわば軽やかな開かれた現実といったものが、そこには感じられる——は彼の〈救い〉とそうした夢の世界（新しい第二の人生⁹⁾）の現在性 *actualité* を彼が現実に確信するに至ったことをわれわれに納得させる。Richer はネルヴァルのこうした文学的（詩的）勝利を彼の実人生に直結して考えようとする。すなわちそのように夢の世界を信じ得、死の世界での救済を信じ得たものには『オクタヴィ』における〈私〉の告白通り、死は願わしいもの、なんら恐しいもの、不吉なもの、人生の敗北者の逃避でもなく、むしろ魂に永遠の安らぎと平和を与えるもの、と感じられたにちがいないという。そのようにネルヴァルにおける詩的現実のプランと現に生身の人間が生きている日常的現実としての実人生のプランとを同一次元で直線的、連続的に結びつけ、死がこの両者の必然的な融合と完結であると見る。すなわちネルヴァルはこの詩的現実の真実性を最終的に完結するため、あるいはその真実性を最終的に証明するため、実人生を犠牲としたのだ、と Richer は考える。このような見方は作品の世界に立って考える限り正しいように思われる。

事実、ネルヴァルは『オクタヴィ』の主人公「私」を通して次のようにいっている。

死ぬということ、おお神よ！ 何故こんな考えが、たえず私に立ち返ってくるのでしょうか。まるであなたのお約束なさる幸福に相応しいも

のは私が死ぬことだけだ、とでもいうように。死！ このことばは然し私の心の中に少しも暗い影を拵げはしません。死は祝宴の終わりの時のように色あせたバラの冠をかむって現われる。私は時々夢に見ました。死が幸福と陶醉の後で、最愛の女の枕辺に微笑みながら私を待っているのを、そして私に呼びかけるのを。「さあ、若者よ！ お前はこの世におけるお前の欲びの分前をすべて尽してしまった。今は眠りにつきにおいて、私の腕の中に憩いにおいて。私は美しくはない、しかし私は善なるものだし、いかなる人をも救って上げるものです。私は快樂を与えはしない。けれども永遠の安らぎを与えよう」と。¹⁰⁾

この『オクタヴィ』の主人公「私」が現実のネルヴァルと同一人ではないにしても、書簡などから判断して、非常に作者に近い人物であるということもまた事実である。それ故この「私」をかりに作者ネルヴァルとすれば、彼は死というものをそのように考えており、死は彼にとって恐いもの、不吉なものではなく、むしろ安らぎを与える願わしいものである。『オーレリア』になるとこの考え方はさらに進み、死は彼にとってかつて愛したすべての人々と永遠に相会し、共存する安息の場と考えられるに至る¹¹⁾。そのことを彼はたとえ次のようにいう。「オーレリアが死んだのであった。……私自身もあとほんの僅かしか生きる時間がないと思ひ込み、それ以来愛する心と心とが再会する世界の存在をかたく信じていた。それに彼女は生におけるよりも、死においてははるかに多く、私のものなのであった。」¹²⁾ ネルヴァルのこうした「死」—というより死後の世界—にかける期待というものは一つの信仰にまで高められていたと思われる。そしてこの信仰は詩『アルテミス』においてある種の神秘主義を通して詩的現実の中に結晶化されたように思われる。

揺籠から柩の中まで愛してくれた女^{ひと}を愛するのだ。

私だけが愛する女は、今も私を優しく愛している。

それは死だ—あるいは死んだ女だ…

おお喜びだ！ 苦しみだ！¹³⁾

彼の信仰の原核となっている *Vierge-Mère-Déesse* (*Aurélia* であり、*Adrienne* であり *Artémis* でもある) という三位一体的 女性神話はこのように死と同一の次元で考えられており、この地点ではほとんど死と救済とが同一の意味内容をもっているかの如き印象をわれわれに与える。このように考えてくると、確かにネルヴァルは日常生活における敗北者の絶望から、現実逃避として死を求めたのではなく、彼が作品に表現した詩的現実の世界を最終的に完成するため——さらにいいかえれば、後年研究家によって「ネルヴァル神話」と呼ばれることとなる神話の世界に実際に踏み入っていくための積極的な出発として——自らすすんで死を選びとったのだ、と考えることもそれほど不自然ではないように思われる。このような見方はたしかに『オーレリア』とヴィエユ・ランテルヌの悲劇との矛盾をみごとに解決している。われわれもまたこの解釈がネルヴァルの死の意義を結果論的にまた観念的に、そういつて悪ければ本質論的に考えた場合、多くの点で妥当性を獲得しているということを認めるにやぶさかではない。だがここに一つの疑問がある。それは同氏が1851年の *Mercur de France* 誌に掲げた『ネルヴァルとその^{まぼろし}亡霊』という論文では『オーレリア』におけるネルヴァル救済説を否定している事実である。長いが要点を引用すれば「ネルヴァルはこれまでいかなる真の入門 *initiation* にも接せず、いかなる深い改心も心中に起こることはなかった。(真の信仰に入るのを妨げる) 障害は依然同じままであった。ネルヴァルがこの種の《*pas*se》への夢の啓示を神によって認められた救済の確証に他ならぬと信ずることができたのは彼の自己暗示 *auto-suggestion* によってなのである。それ故彼の体験には何ら神秘的意味を与えることもできないし、又彼自身そうした自己の体験の限界をよく知っていた。」¹⁴⁾ というものである。われわれもこの見解をある種の留保つきで支持するものだが、だとすれば上述のごとくのネルヴァルの死に関する同氏の解釈—神秘思想の信仰による救済を得るための積極的な死—は矛盾することになる。同氏もこの矛盾を感じていらしく、彼の長年のネルヴァル研究をまとめた膨大な博士論文(『ネルヴ

『ネルーその体験と創造』として1963年 Hachette 社から出版)では1940年代のこのような見解を多少修正している。すなわちネルヴァルの死が(1)老衰の拒絶, 生理的なある種の原因, (2)精神的悲惨, 孤独感, 人生における挫折感, 創作能力への不安などもその一因であったことを認めるにいたっている。だが, 同氏はこの博士論文においても, ネルヴァルの死は根本的には上に述べたような神秘的思想のために積極的に選び取られたものである, として従来の説を変えていない。根本的に変えていない以上, 先に述べた矛盾はこの博士論文においても依然として解決されていない。このことはネルヴァルの死に関する同氏の解釈が成立しないことを自ら認めていることを意味する。

それではネルヴァルの死に関して, 一体どのような見方が考えられるであろうか。現に一日一日を生きている人間は死といった人生の一大事を前にした場合 Richer が考える以上に, 複雑な反応の仕方をするのではなからうか。ネルヴァルがいかに神秘主義思想に深く影響を受けていたとはいえ, Franz Hellens も指摘するとおり¹⁵⁾, 彼も根本的に近代人——すなわち, カルテジアンとしての理性人——であり, さらにいえば, Raymond Jean が強調するように¹⁶⁾, 日常的現実においては非常に現実主義的側面が感じられる人でもあった。一例として彼は生涯, ブルジョワ意識——売文家としての意識——を持つことに徹した人であつた¹⁷⁾。それによつて「金持」になることすらひそかに夢見た¹⁸⁾人であり, Balzac などと同じように実生活では当時の典型的な文士としての意識を持っていた。これは重要な点である。ネルヴァルはもし自分にもものを書くという機会が与えられなくなったり, 創作力の減退から, 書けなくなってしまったら, もはや自分は生きてはいけない, という意識 obsession につかれながら書きまくつた人である¹⁹⁾。それ故ネルヴァルは Richer などがいうように, その思想的結論として死を選んだのではなく, 彼の死の原因ないし動機はもっと具体的なところにあつたように考えられる。文学者や思想家が自殺する場合, 一般の常識に反して, 彼は自己の思想や信念のために——その行きづまり

のためにせよ、そのあかしのためにせよ——自ら死を選ぶことはきわめてまれのように思われる。彼らが自らの死を選ぶとき、それは実際にはもっと身近な、ある意味では非常に俗っぽいことがらに起因している場合が意外に多いように思われる。

実際、ブランシュ病院を退院してから（1854年10月9日）の彼は親身になって面倒をみてくれる者はだれ一人なく、またきまった住いも持たず、いわば放浪者のような常軌を逸した生活をしていた。安定した収入源も絶え、死の直前の彼は身につけるものにも不自由するほどの経済的窮状に陥っていた。²⁰⁾ さらにまた、このころには精神的にも肉体的にも相当疲れ果てていたらしく、「私は人生に疲れ果てていた」²¹⁾ とか「すべては終わりだ！」²²⁾ などといている。Raymond Jean が指摘する如く²³⁾、実際こうした彼の物質的、精神的悲慘が彼の自殺の、直接的な原因をもっとも決定的に説明しているように思われる。さらに彼の精神病が精神の抵抗力を正常時よりも弱いものにしていて、ということ、そしてそうした精神の衰弱が彼の死を早めた、ということも当然考えられる。だがそれ以上に注目すべきことは、彼が晩年自己の創作力の涸渇を非常に気にしていた、という事実である。1854年6月27日付 George Bell 宛の手紙で彼は「君はわかってくれるだろうか、私の創作能力に対する不安が私をもっとも落胆させるものだ、ということを」²⁴⁾ といている。また、死の直前、友人の一人 Louis Legrand に「私は自分を見出すのにまったく数時間もかかる。そしてそうした努力が永遠に終ることはないでしょう。君は信じてくれるだろうか。一日かかってやっと二行位しか書けない、ということ」²⁵⁾ と訴えている。さらに1月25日の朝、すなわち死の前日、友人の Asselineau に「自分に何が起ころうとしているのかわからない。とにかく不安なのだ。ここ数日来、文字通りもう一行も書けない」²⁶⁾ と語っている。「自分に何が起ころうとしているのかわからない」という告白は彼自身忍び寄る死の影を意識するともなく感じていることを暗示するような言葉であり、また「とにかく不安なのだ」といった言葉は死の前日だけに芥

川の「将来に対する漠たる不安」といった言葉を思わせる自殺者に共通した不吉なものを感じさせるが、それはともかく、作家にとってものが書けない、ということは恐らく決定的なことなのであろう。少なくともネルヴァルは作品を創造するという文学者としての役割を引受けることができないならば、もはや生きていく意味がない——というよりもはや生きていけないと短絡的に思いつめてしまったのではなからうか。作家というものは、ものが書けなくなれば作家という職業をやめ、他の仕事を見つけて生きていけばよい、といった通俗的な考え方が通用しない人々のように思われる。そこには度しがたい彼の過去の栄光、作家としてのプライドというものもあろう。それ故、繰り返せばネルヴァルは決して思想や信仰のために——少なくともそれが直接的動機で——死んだのではなくむしろ現実生活における物質的・精神的悲惨、行きづまりのために死んだのではなからうか、ということである。この意味ではネルヴァルは文学的には夢の世界や超越的なものの真実性と実在性を信じ得、それ故救済された (Béguin)、あるいは救済の予感を確実にもち得た (Richer) であろうが、実人生におけるネルヴァル、つまり生身の人間としての彼はそれにもかかわらず、救済され得なかったのではないか、と感ぜざるを得ないのである。

3. “殉教”

ネルヴァルの死がデカルト哲学でいう“コギト的延長”のごとく、作品の世界の直線的延長として、すなわち作品の世界と現実の人生との最終的な融合と完結として、彼が積極的に選びとったものであると仮定してみよう。これが事実なら、彼はある意味で救済されたといえよう。なぜなら、彼は作品の世界において予感した愛する人々との永遠の共生 *coexistence*²⁷⁾ や魂の救済といったものの全実現には現実の生が犠牲として捧げられねばならぬと固く信じて死の扉を叩いたのであろうから。彼がそのような信じて現実の生を死の犠牲にしたのだとすれば、それこそ“ロマンティスム”²⁸⁾の悲劇そのものといえないだろうか。なぜなら、正統的な宗教は多く

超越的なものとその世界の存在を説く。それにもかかわらず、いやむしろそれ故にこそ「今・ここ」 *maintenant-ici* としての現実の生をかえって大事にすべきことを教えているからである。そのことはたとえば Paul Tillich が現代人、ことにヨーロッパ人の多くは「過去によって支えられ、そこから自らを引き離すことができず、さもなければ未来に向って逃げ、現在に休息を得ることができない……彼らは〈現存〉を受けとめる勇氣に欠けている」²⁹⁾とっていることから理解されよう。正統的な信仰には、死後の世界の意味と現実の生の意味とを決して直線的に同一次元では結びつけぬある種の絶対的ともいえるパラドックスが存在していると考えられる³⁰⁾のに対して、ロマンティスムに認められる無限なるものや超越的なものへのあこがれの意識にはこうした逆説が欠けていると思われる。つまり近代のロマンティスムには「今」ではなく過去や未来に、「ここに」ではなく彼方に、しかもデカルト的コギトの延長界に、すなわち逆説や飛躍の欠如した、コギトと一元的に連続したところに、そうした無限なるものや、超越的なものを求める傾向が認められる。したがってネルヴェルが死後の世界のために現実の生を自ら好んで捨てたのであるとすれば、それは正しく彼の信仰にこうした逆説が欠けていた、ということ、その意味でロマンティスムそのものであり、その必然的帰結であったということになる。この間の事情を小説『シルヴィ』を例にとって考えれば、ネルヴェルはそこで一度は〈現実〉の中に生きる意味を求めて、日常的な世界における *maintenant-ici* に回帰しようとした。しかし彼は現実の生の中にもはや意味を見出すことができなかつた。つまり彼はそのような *maintenant-ici* のうちにそれを意味づけ、その中に生きることの正当性を保証するある種の絶対的な視線をもはや感ずることができなかつた。そうした超越的な何者かの視線の不在性に耐えられず——別ないい方をするなら、そうした *maintenant-ici* の無意味性に耐えられず——再び夢の世界へ、「地平線の彼方」の世界へと向い、そこにのみ彼の生の意味が存在することを確信するに至る。こうした彼の精神のドラマは作品の上からもたとえば詩では

『従妹』や『祖母』から『エル・デスディチャド』や『アルテミス』へ、小説では『シルヴィ』から『東方旅行』、『オーレリア』へといったプロセスのうちにも認めることができる。ところで彼の夢見る信仰の世界——具体的には自らつくり出した *Déesse-Mère-Amante* といった女性神話を中心とした宗教的混濁主義^{サンクレティスム}だが——は死の世界に属するものであるため、当然の帰結として死を自らの手で「現実生活のただ中に」たぐり寄せることになったのである。このように時間と空間を越えた世界、いわば夢の世界において無限なるもの、超越的なものの存在を信じ得ていながら、日常生活における *maintenant-ici* に、さらにいえば非常に具体的な事柄のうちには絶対者の視線の反映を感じることができない、というジレンマ、これは正しくロマンティスムの根源的な構造であり、本質である。そのためにある人間が現実の生を自らの手で絶ったとすれば、その人は正にロマンティスムの犠牲者、そういつて悪ければ殉教者である。ともあれそれは人間としてはやはり悲劇である。私にはそう思われる。

ところでネルヴェルは直接的にはそのように考えて——自己の思想や信仰のために——自殺したのではない。彼の死はすでに述べたごとく精神の衰弱、極度の貧困、孤独、その夜の恐しいほどの寒さ（ -18°C ）といった非常に平凡なことがその直接的な動機であったように思われる。そしてさらに根本的な原因は彼の創作能力の枯渇、ないし枯渇への不安——それはほとんど強迫観念の色を帯びていた——であったように思われる。自分が好んで選んだ仕事、そしてそれを自己の天職と信じ、それに自己の生きる意味を感じていた仕事、そういう仕事を続け得なくなった場合、人は時として生きる意欲を失ってしまうに違いない。その時には絶望するというより、思考を停止させてしまうような恐しい——それでいて心地よいといった——名づけようもないある種の眩暈を感じるのである。ところでこの眩暈こそ——それが零下 18° という雪の夜であってみればなおのこと——恐らく『オクタヴィ』に出てくるような死の女神のもつあがらい難い魔力の別名ではなかったろうか。

ところでネルヴェルの作家としての職業への執心——書けなくなったらもはや生きてはいけないといった思いつめた意識——，そこに彼の悲劇がかくされている。つまりそのように思いつめることそれ自体翻って考えてみれば人間精神のもつ恐しいエゴイズム，というよりエゴサントリズムというものではなからうか。生きる意味を自己の内部にしか求め得ないものの悲劇。すなわちロマンティズムの悲劇。自己の存在理由，存在の証し，人生の至上の意味を自己の外においたなら，この種の悲劇は避けられたのではなからうか。少なくともこの種の意識の自家中毒症状を引き起す事態は避けられたのではなからうか。自己を捨て，他者の中に，他者のために生きようと決心したなら，たとえ創作は不可能になろうとも他に生きる道はあったのではあるまいか。自己の内部にではなく，他者性の中に自己の存在主義を見出したなら，ランボーとは異った意味で，彼のように文学を捨て，日常性の中に——さらにいえば社会の中に——生き得たのではなからうか。己の肉体を殺すのではなく，その自意識を殺し，世界を世界として，他者を他者としてその十全なる姿であらしめ，その新しい関係の中に生きるという道がなかったらうか。「その時，私があなたの裡に愛していたのは女性ではなく，〈女神〉に対して愛を捧げていたのです」³¹ といった彼の現実捨象をとまなうイデアリスムから脱する方法が考えられなかったらうか。ともあれ現実には，彼はそのように考えることができなかつたわけで，そこに“ロマンティック”としてのネルヴェルの限界——“近代人”としてのネルヴェルの限界——があったと考えられる。

結論的にいうなら，彼はその死因が Jean Richer や Albert Béguin のように自己の思想，信仰にあったにせよ，Raymond Jean のような創作力の枯渇への不安などがあったにせよ，いずれの場合であれ，広い意味でのロマンティズム，すなわち，近代の人間中心主義 anthropocentrisme，およびそれが内包する矛盾の犠牲者，殉教者ではなかつたらうか。

4. 残された謎

だが、そうはいっても Béguin も指摘する通り³²⁾、彼の死にはわれわれ生者には理解しようにもとうてい理解できない絶対的な謎が残されてしまうこともまた事実である。同時に、ネルヴァルという人間そのものについてもある種の不可解なもの、しかとは見すえがたい何か身につまされるものが依然として残されていることを認めざるを得ない。彼の死についてさらにつけ加えるなら、彼自身『逆説と真理』の中で「葬いほど厳粛なものはない。死というこの重大事を前にしては人間というものがどんなにつまらなく見えてくることか」³³⁾と述べているように、一人の人間の現実の死を前にしてわれわれのそれについてのいかなる詮議、臆測も空しい。死とは体験不可能な厳然たる現実であり、それについて無限の解釈が行われうるが、解釈というものはどこまでいっても所詮は解釈にすぎず、問題の死という現実そのものには決して到達し得ないものである。したがってネルヴァルの死についてその原因が何であったか、ということは本来どうでもいいことである。もしそこに問題があるとすれば、それはせいぜい「死の意味」というか、われわれにとって彼の死がどのような意味を持ちうるか、という点だけである。この意味では Jean Richer や Albert Béguin の論説は有効であり、私の関心も実はそういうところにあった。だがもとより、この点に関しても深く掘り下げ得たとは思われない。

今となってはネルヴァルの死の謎は謎として残しておこう。実をいえばそれがせめてもの死者に対する礼というものだろう。ところで話を元に戻せば、ネルヴァルその人に残されてしまった謎とは次のことだ。われわれはネルヴァルという人間を近代人に共通した精神傾向としてのロマンティズムの殉教者として“解釈”してきた。それに違いないのだが、それだけだろうか。「人々はイエス・キリストを死刑に処した。——彼の弟子たちは彼を捨てた。彼らのうち誰一人として彼のために自らの生命を犠牲にしようとする者はなかった…事が済んでしまうまでは——彼の弟子たちは何も信じてはいなかったのだ。」³⁴⁾ネルヴァルのこの言葉にはすでに述べた

“ロマンティズム”という概念では捉えられない、いわば“原キリスト的
心性”といった感受性が認められはしないだろうか。それは単に『オー
ブ山上のキリスト』ばかりでなく、『オーレリア』や『エル・デスディ
ャド』、『マダム・エ・スヴレーヌ』といった詩篇にさえ深く息づいている
感受性だ。これを抜きにして、ネルヴァルその人を、ましてや彼の「死」
を真の意味で語ることはできない。

「奥様、女王様、

僕の心は悲しみでいっぱい……」

……

なぜか今夜はこのルフランが

頭の中をこぞわしく走り、僕の心を悲しみでいっぱいにする

……

怠け者の僕は 放浪の雑文家

美しい言葉を パンにつけて食事とし

年よりも老け 古い恨みが胸いっぱい

鼠のように警戒深く それでもしじゅう裏切られ

本当の友情なぞ これっぽっちも信じずに³⁵⁾

ここにもまた復活以前の原キリスト的心性といったものがボードレール
流の自虐趣味と感傷性を帯びて息づいている。ネルヴァルの心には実に深
い悲しみと苦悩があり、それは何者によってもいやしがたいものであっ
た。ネルヴァルおよび彼の死について真に語ろうとするなら、ここから出
発すべきであったのだろう。

彼は自らの死が“解釈”されることを拒むかのように『墓碑銘』という
詩の中でこんな風に歌っている——死はただ「歌う」ことによってしか語
り得ないのだ、とでもいうように……。

冬の日のある夕暮、^{このよ}人生に疲れ果て、

最期の時が来て、とうとう彼から魂が奪われる時、

彼はこういいながら逝ってしまった。「私はどうしてこの世にやってき

たのだから」³⁶⁾

1855年1月26日の朝もまた、彼はそのように「私はどうしてこの世にやってきたのだから」と呟きながら、雪降り積るヴィエニユ・ランテルヌ街の路上に立ちすくんでいたのであろう——友人 Janin には「今日はとてもいい日なので、家でお会いすることも抱擁することもできません。急いで帰ります。さらば」³⁷⁾ という謎の言葉を残し、死の前日³⁸⁾ 叔母には「今夜は私の帰りをお待ちにならないで下さい、夜は暗く、また白くなるでしょうから」³⁹⁾ という不思議な言葉を遺したまま……………。

註

- 1) Léon Cellierはそのネルヴァル論の中でそれまでいわれてきた多くの説を詳細に紹介している(Gérard de Nerval éd. Hatier, 1963, pp. 160~169)。
- 2) Léon Cellier: Gérard de Nerval, éd. Hatier, 1963, pp. 168~169.
- 3) Henri Lemaître: Introduction des Œuvres de Gérard de Nerval, éd. Garnier, I, 1958, p. Ⅻ.
- 4) Léon Cellier: Gérard de Nerval éd. Hatier, p. 166.
- 5) ibid., p. 167.
- 6) Jean Richer: Gérard de Nerval et les doctrines ésotériques, éd. Griffon d'Or, 1947, pp. 189~192; Nerval—expérience et création, éd. Hachette, 1963, pp. 637~647.
- 7) Albert Béguin: Gérard de Nerval, éd. José Corti, 1945, pp. 76~77, 129.
- 8) ibid., p. 62.
- 9) Œuvres, éd. Pléiade, I, 1952, p. 363.
- 10) ibid., pp. 311~312.
- 11) たとえば Œuvres, Pléiade, I, Aurélia, p. 372 (I-4), p. 176 (I-5), p. 378 (I-9), p. 417(II-6).
- 12) Œuvres, Pléiade, I, p. 378.
- 13) ibid., p. 35.
- 14) Jean Richer: Nerval et ses fantômes, Mercure de France n° 1054, 1951, p. 291.
- 15) Franz Hellens: Nerval, le romantique, Europe, avril 1972, pp. 31~33.
- 16) Raymond Jean: Nerval par lui-même, éd. du Seuil, 1964, pp. 88~90.
- 17) ibid., pp. 30~34.
- 18) Œuvres, Pléiade, I, p. 797.

- 19) Raymond Jean : Nerval par lui-même, p. 34.
- 20) Aristide Marie : Gérard de Nerval, le poète et l'homme, éd. Hachette, 1955 p. 343.
- 21) Œuvres, Pléiade, I, p. 372.
- 22) ibid., p. 431.
- 23) op. cit., p. 47.
- 24) Œuvres, Pléiade, I, p. 1096.
- 25) Aristide Marie : Gérard de Nerval, le poète et l'homme, p. 346.
- 26) ibid., p. 347.
- 27) Œuvres, Pléiade, I, p. 417.
- 28) 私のいう“ロマンティスム”とは狭義のロマン主義すなわちフランスの場合、1830年代に最盛期を迎えた文学流派 école littéraire としてのロマン主義のことではなく、あらゆる近代精神、ルネサンス以後次第に顕在化し、19世紀に至って頂点に達した一切の人間主義、自我中心主義の思想ないしそうした精神の態度を意味している。つまり合理主義思想、進歩の思想、狭義のロマン主義思潮、社会主義思想といった宗教的逆説を欠いたあらゆる近代思想を包括し得る上位概念として、“ロマンティスム”なる言葉を使用。
- 29) バウル・ティリッヒ「永遠の今」新教出版社 p. 166.
- 30) ibid., pp. 158~159. Tillich はたとえば<永遠>は「時間の後 (after) にあるのではなく、時間の上に (above) 現にある」といつている。
- 31) Œuvres, Pléiade, I, p. 1263.
- 32) op. cit., p. 129.
- 33) Œuvres, Pléiade, I, p. 423.
- 34) ibid., p. 431. なお Charles Mauron も「ネルヴァルは1841年以来、無意識のうちに自分をキリストと同一視していたのではなかろうか」と述べ、ネルヴァルにおけるキリスト的心性の存在に言及している (Nerval et la psycho-critique, Cahier du Sud, n° 293, 1949)。
- 35) ibid., p. 72.
- 36) ibid., p. 73.
- 37) ibid., p. 860.
- 38) 厳密にいえば死の前々日、すなわち1855年1月24日。
- 39) Œuvres, Pléiade, I, p. 1134.

(筆者は本学講師・フランス語)